



巻頭言

新しい科学技術教育へのアプローチ

辻 三 郎*



1993年の新春を迎えまして、大学で教育・研究にたずさわる一人として、心からお祝いの言葉を申し述べます。

新しい生産と技術を創り出すためには、大学の工学教育が重要なことは言うまでもありません。しかし、日本の大学が、大きく変る社会、急速に発展する技術に立ちおけていることは否定できません。“この現状を何とかしたい”というのが、現在論議されている大学改革です。

例えば、批判の多い一般教養の枠組みを外して、それぞれの大学が自主的に教育のあり方を考えています。科学技術の教育も、多くの問題があります。多様化し、しかも進歩が著しい先進技術の内容は、4年の学部教育で理解することは難しい。益々重要性のます研究開発能力を考えると、学部と大学院を一体にした教育システムが不可欠と我々は考えています。

しかし、大学院大学という名前をつけただけでは何にもなりません。現在の工学系大学院の問題点を少し考えてみましょう。皮肉にも、先端技術の急速な進歩が、多くの問題をもたらしたとも言えます。とぼしい研究費の

ため、使用する装置は技術革新にとり残され、時代おくれになります。複雑化するシステムを、保守・運用する人員の確保も困難です。建物面積の不足は、しばしばマスコミでも報道されました。

さらに重要なことは、大学の研究室が第1線の技術レベルを維持することが難しくなっていることです。優秀な学生は、大学院博士課程に進学しなくなり、研究を推進するパワーを失う危険が現れてきました。

我々は、魅力のある科学技術研究・教育の場として大学を再構築しなければなりません。基礎工学部は、大学と大学院の一体化の道を進んでいます。3年次から大学院に進学する制度が発足し、意欲のある多数の学生が合格しました。彼らの大学院での勉学・研究実績も好評で、やがては学部と修士課程を一貫し、5年で研究開発の人材を育成するシステムが確立するでしょう。彼らの多くは、博士課程に進学し、わが国の基礎研究を支えると期待しています。

最後に、強調したいことは大学と社会との連りです。企業で働きながら大学院学生として学び、研究する人の数は、我々のところでも増えています。産業界の技術・経験・ニーズは、大学院の活動の活性化の源です。皆様と共に研究する機会の増えることを心から希望します。

*Saburo TSUJI

1932年1月27日生

1955年大阪大学大学院修士課程修了

現在、大阪大学基礎工学部長、工学博士、人工知能、ロボティックス

TEL 06-844-1151